

序

日頃からりんくう総合医療センターの運営に対しましては甚大なご支援を賜り、有難うございます。心から感謝申し上げます。平成30年度の病院年報が出来上がりましたので、お届けします。

当院は昭和27年開設の「市立泉佐野病院」から数えて67年目、平成9年に現在地のりんくうタウンに新築移転し、循環器科、心臓血管外科、脳神経外科、整形外科、歯科口腔外科などの診療科を新設、さらに感染症センター10床を増設して358床に増床、病院名を「りんくう総合医療センター―市立泉佐野病院―」としてから21年目になります。その間、国際空港前に位置する特徴から、災害拠点病院(平成9年)、特定感染症指定医療機関(平成12年)、国際外来開設(同18年)、外国人患者受入れ医療機関認証(同25年)等々、特殊機能を整えると共に、隣の貝塚市民病院と共同で泉州広域母子医療センターを開設(同20年)、大阪府がん拠点病院(同21年)、地域医療支援病院(同23年)等、市民病院として、さらに泉州南部地域の基幹病院としての機能を強化して参りました。

そして、平成23年に地方独立行政法人化し、平成25年には隣接する大阪府立泉州救命救急センター(30床)と統合、現在の病床数388床の「地方独立行政法人りんくう総合医療センター」として、南泉州地域における急性期基幹病院としての機能強化を整えてから、5年が経過しております。

泉州救命救急センターとの統合は、病院の各専門診療科と救命救急の協働による“相乗効果”により、病院の高度専門医療・2次救急医療と、救命救急センターの3次救急医療とが共に、質と量の向上をもたらし、前年度に引き続きアドレスフリーを基本とする病床管理は、現場と地域医療連携室の絶妙の工夫と努力により、前年度以来、90%強の病床稼働率を維持しております。

平成30年度の一番のトピックスとしては、予てからの念願であった、“DPC 特定病院群”の指定を叶えたことです。府内の政令指定都市を除く市民病院の中では最初の指定となり、運営上の利点のみならず、職員のモチベーションを大きく向上させています。

二番目としては、「患者サポートセンター」を2階外来に開設、医師、看護師、ソーシャルワーカー、薬剤師、理学療法士、栄養士など、多職種のスタッフによる“入院前から退院後にまで至る幅広い医療サービス”の提供を開始しています。

三番目は、「りんくうウェルネスケア研究センター」の開設です。当院は、どちらかというと重症疾患の急性期・超急性期医療を特徴とする反面、従来は内科系の専門医師の不足から、慢性期医療への体制については必ずしも十分ではありませんでした。一方、泉州地域の住民の検診受診率は低く、喫煙率は高く、慢性期疾患への対応と検診業務の促進が必要な状況があり、平成27年に山下静也病院長が就任以来、内科系医師は徐々に充足する中、当年度初頭に、「りんくうウェルネスケア研究センター」を発足しております。

また、平成30年は関西地方が地震や台風などの自然災害に見舞われた年でしたが、中でも、9月には、室戸台風以来の関西直撃の大型台風21号が昼間に泉州地域から大阪を直撃した際、地域の多くの病院が停電のために機能不全に陥る中、当院が立地する「りんくうタウン」は電柱、配管が全て地下に埋設されていることから幸いにも停電を免れ、また、常日頃から災害訓練を重ねている救命救急医を中心に、迅速に災害本部を立ち上げ、見事な危機管理を披露してくれました。

少子高齢化が進む中、急速な医療改革が進められておりますが、地域医療支援病院として、南泉州地域における地域包括ケアシステムの構築に向けて、皆様方との密な連携をさらに深めて、より良い医療環境を整えるべく、病院職員が一丸となって尽力する所存です。

この地域で日頃からお世話になっております皆様方、また、常に何かとご支援を頂戴している大学、諸機関の方々、今後とも引き続き、当センターに対する益々のご指導とご鞭撻を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

理事長 八木原 俊克

序

平成30年度はりんくう総合医療センターが地方独立行政法人化してから8年目、さらに大阪府立泉州救命救急センターとの統合後、6年目の年でした。当センターは救命救急病床30床、感染症病床10床を含め、総病床数388床を有しており、大阪府がん診療拠点病院、地域医療支援病院、災害拠点病院としての機能に加えて、泉州救命救急センター、泉州広域母子医療センター、特定感染症指定医療機関であるなど、極めて特徴的な医療機能を有した高度急性期病院です。母子医療に関しては、市立貝塚病院との泉州広域母子医療センターの共同運営を行い、産科医療・新生児医療(NICU)という極めて重要な役割を果たしています。また、関西国際空港の対岸という土地柄、当院には国際診療科があり、国際診療の分野でも全国的にも有名な施設です。近年、海外、特にアジア地域からの旅行者数が激増し、海外からの当センターへの受診も増えており、大阪在住外国人の診療も増加しています。平成28年度末にはインバウンドの国際診療がさらに充実できるように、国際診療科の新装移転も行い、本年度から専門医師による国際診療外来も開設しました。

更に当センターは重症急性呼吸器症候群(SARS)、新型インフルエンザ、エボラ出血熱、中東呼吸器症候群(MERS)等の新興感染症のアウトブレイクに備えて、我が国に4病院しかない特定感染症指定医療機関であり、関西の砦という重責も任されています。平成30年4月よりDPC対象病院の中でII群、DPC特定病院群(大学病院本院と同等の高度良質な医療を幅広い疾患に対して提供できる病院)に指定され、大阪府下でも極めて限られた大病院の仲間入りをし、大変喜ばしい限りです。

一方、当センターでは泉州南部における病病連携・病診連携をより迅速にする診療情報連携システム「なすびんネット」を導入し、地域医療連携を積極的に進めてきました。泉佐野・泉南医師会の先生方との病診連携をさらに活性化させるため、平成29年4月より、りんくうメディカルネットワークを立ち上げ、地域の先生方との積極的な交流・情報交換を行ってきました。『泉州南部卒後臨床シミュレーションセンター(サザンウィズ)』では、臨床技能の習得及びチーム医療の充実を図る教育プログラムを実践しており、この斬新な試みもあって、初期研修医の人気も急上昇し、研修枠も増えました。また、業績欄にも記載されていますように、多くの国内外の学会発表や英文・和文論文も発表され、その量及び質は他病院にも誇れるのではないかと自負しています。

南泉州地域では健診受診率が低く、そのために癌や循環器疾患による死亡率が高いことが知られていますが、予防医学を推進し、研究マインドをもってりんくう及び南泉州地域の特色を活かした事業を多彩に進めるため、2018年4月より「りんくうウェルネスケア研究センター(RICWA)」を開設しました。本センターでは地域の健診受診率を向上させ、生活習慣病や家族性高コレステロール血症などの高頻度な遺伝性疾患の早期発見・早期治療を目指して、地域の保健師の教育・情報交換や特定健診の指導等も行っています。

当センターでは消化器内科、眼科、放射線科、糖尿病・内分泌代謝内科、等の一部診療科医師が不足していましたが、消化器内科医4名、放射線科医2名、糖尿病・内分泌代謝内科6名体制となり、人材が充実してきました。当センターでは最近2年間赤字経営となっていました。皆様ご存知のとおり、都道府県が主体となって「地域医療ビジョン」が策定され、これまで以上に地域完結型医療の実践が求められています。当地域は従来から非常に病診連携・病病連携が緊密に行われてきた地域であります。大阪南部の中核となって良質な医療を提供できるように、医療連携や病院運営に関して、是非とも皆様方の忌憚のないご意見を賜りたく存じます。今後とも何卒宜しく願い申し上げます。

病院長 山下 静也